

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2019年5月8日 発行

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井宣光

人はみな、草のようで、その華やかさは、すべて草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。(ペトロの手紙Ⅰ 1:24~2)

制服の不易流行 (ふえきりゅうこう)

「わたし、松蔭の制服を着たことがあるんです。」ある私学の女性の校長先生が、制服を着た経験があると仰ったので、大変驚きました。他校の校長先生方とお会いすると、話題は、働き方改革にICT教育、入試改革から私学経営など多岐にわたりますが、時にはとりとめのない話に花が咲きます。生まれも育ちも神戸という彼女は、中高時代、近隣の学校の運動部員として、試合や練習で松蔭のグラウンドに足繁く通い、親しくなった松蔭生から制服を借りて着た経験があるとのことでした。その交友関係は今も続いていると楽しげに話されました。よく知られた制服なので、生徒ではなくとも、一度は着てみたいと思う方が多いのでしょうか。他校ではフルモデルチェンジやら、上下の組み合わせパターンを何通りか作ったりと、生徒が着たい制服にしなければならないと苦心されているようです。幸いなことに松蔭生は、全員が制服を気に入っている(と私は信じている)ので安心してますし、学校評価アンケートでも、これまで制服を変えてほしいとの要望はありません。

制服の制定から94年経ちますが、当初はセーラー服案やツーピース案もあったと記録されています(松蔭女子学院百年史)。その後ミッションスクールにふさわしいデザインとして制定されたのが、上の全校生写真に写る制服です。現校地へ移転後間もない1935年の撮影ですが、エセルホール入口近くの柱にも当時の生徒写真(右上の写真)が巻き付けられています。ワンピーススタイルの真白なデザインは、現在の制服姿の写真(下の写真、2012年撮影)と変わりませんが、当時は長袖で、白いストッキングを着用していました。現在の夏服は、半袖になり襟の形や大きさが変更され、印象が異なります。90年代後半から女子高生たちの間で制服に白ルーズソックス姿が大流行し、その波は松蔭にも押し寄せました。伝統ある制服に似合うはずありませんから、校則が改定され、現在のようにSMSマーク入りの制定ソックスが出来上がりました。数年前には、生地素材なども変更され、制服は時代と共に変化してきました。



教育の場で「不易と流行」という言葉が使用されることがあります。中教審(中央教育審議会の略。文部科学大臣の諮問機関で国の教育政策の指針を定める)や臨教審(臨時教育審議会の略。内閣総理大臣の諮問機関で総理府に設置される)が約20年前の答申に記した、「教育においては、どんなに社会が変化しようとも、時代を超えて変わらない価値のあるもの(不易)がある。」「しかし、



また、教育は同時に社会の変化に無関心であってはならない。時代のあるもの(流行)に柔軟に対応していくこともまた、教育に課せられた課題である。」という文章が、学校関係者の間で広く引用されるようになったのです。ある学校は「わが校の不易と流行」と銘打ち、学校運営方針を公表しています。一般には、変わらない要素や変えてはならない価値あるものを「不易」とし、時代とともに変わる要素や、社会変化に対応する新たな素材を「流行」として対比させます。

「不易流行」は、江戸時代の俳人、松尾芭蕉が打ち立てた蕉風俳諧の理念の一つとされています。弟子の向井去来は、師の俳論を著書『去来抄』にまとめました。その一節に「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」とあり、解説書によれば、俳諧の特質は新しみにあり、その新しみを求めて変化を重ねていく「流行」性が「不易」の本質に他ならない。両者の根本は一つ、という考えに基づく、と説明されています。教育界で使用する場合には、両者を対比させるよりもむしろ、昔も今も教育の根本は変わらないが、時代に応じた教育コンテンツにより、生きる力を育む、というような使い方が適切かも知れません。

ひと昔前、「断捨離(だんしゃり)」がブームになりました。今も実践中という方もおられるかも知れません。松蔭生の多くは、卒業に際して制服を夏冬一着ずつ保管するようです。家族写真は決して「断捨離」できないといいますが、松蔭生にとっては制服もその1つではないでしょうか。「断捨離」する、しないの線引きが不易流行の実践だとすると、松蔭で教育改革をすすめることは、この学校のあり方の不易流行を、再確認していく作業そのものだと感じています。

今年からフルタイムのネイティブ教員4名が勤務していますが、前掲の1935年撮影の写真を拡大して見ると、中央最前列に立つ校長先生の隣には、顔立ちからすると外国人教員と思われる5名の女性が写っています。この時代の校内でも、今と同様に英語が飛び交い、生徒たちが耳にしていたのではないかと想像しています。母校に娘を入学させた卒業生から、「今の生徒はよく英語を勉強していますね」「英検合格者数はすごいですね」という声を聞くようになりました。「英語の松蔭」の合言葉が一層浸透し、生徒たちが、身構えることなく「英語くらいはできます」と言えるようにしたいと考えていますが、昭和初期の全校生徒写真からは、松蔭が、世界に通じる港湾都市神戸で、英語と国際性に傑出した特色教育を誇る学校であったことがわかります。教育改革が、新しいものだけを追求するのではなく、行きつ戻りつで可能であることは伝統校たる所以でしょう。キリスト教主義学校を象徴する清楚な制服の歴史を見ると、あらためて不易流行の精神を垣間見ることができます。

文化祭のテーマは“Imagination（イマジネーション 想像力）”

先月 28 日、文化祭を開催しました。家族や友人、学校見学の小学生とその保護者の方など約 1200 名が来校されました。プログラム冊子に「イマジネーションは隔（へだ）ての壁を越えて」と題して拙文を寄せました。すでにお読みいただいた方もおられると思いますが、再掲させていただきます。

解剖学者の養老孟司（ようろうたけし）さんの著書「バカの壁」がベストセラーとなったのは、十数年前のことだ。人と人との間には、絶対に分かり合えない壁があり、それを「バカの壁」と呼ぶそうだ。無意識のうちに「私には関係ない」とか、それこそ「相手が馬鹿だから、理解してもらえないのだ」と考えるような思い込みのことである。誰もが持っている「バカの壁」は、人と人との間にある「隔ての壁」である。聖書にも、たびたび「壁」が登場する。ユダヤ人と異邦人の間にある差別や敵意の「隔ての壁」を、キリストが十字架によって取り壊し、2つを1つにして平和をもたらした、という話がある。（新約聖書「エフェソの信徒への手紙」）しかし、民族や国籍、宗教の違いは、今なお偏見の原因である。連鎖して生み出される憎しみや敵意の根源であり続けていて、時には戦争を引き起こす。「バカの壁」や「隔ての壁」は根深く、しつこく、質（たち）が悪い。

戦争中にミサイルの発射ボタンに指を掛けた兵士が、このボタンを押してミサイルが飛んでいくと多数の犠牲者が出る。その人たちにも、自分と同じように愛する家族や友人がいる、と想像している姿を思い浮かべた。蔭口を言い触らす知り合いに腹を立てている人が、きっとあの人は思い通りにいかない人生に、苦しみ、もがき、発散しなければやってられないのだ、と想像している姿も思い浮かべた。若者と老人が、たがいを理解不能と罵（ののし）り合う場面で、年月を重ねた経験に基づく判断もあるのだろうと若者が想像し、未熟だった若かりし頃の自分の生き様を重ね合わせる老人を思い浮かべてみた。「自分の気持ちを全然わかってもらえない」と、親に不満を抱いている高校生が、何でもかんでもハイハイと望みを叶（かな）えてくれる親だったら、自分は幸せで、本当に良い親なのか、と冷静に自問自答する姿も思い浮かべた。

文化祭のテーマがイマジネーションと決まった。各クラブは思いっきり想像力を膨（ふく）らませて、魅力的な舞台や展示を見せてくれるのだろう。私たち観客も、想像力を刺激してもらい、楽しもう。今年は、見せる側も見る側も、イマジネーション能力の向上をはかる文化祭にしてみよう。想像力が乗り越えない「壁」はない。（2019年4月26～27日 文化祭パンフレット校長巻頭文より）

大災害発生に心も物も備えて

今年1回目の校内避難訓練を先月中旬に実施しました。昼休み中の校内での火災発生を想定した訓練でしたが、休み時間や朝終礼の前後など、教員が教室にいない場合の避難の仕方や、登下校中、休日などに家族と離れているときの対応も確認しました。学期中の通常授業日には、教員研究日を設定していますので、これまで大災害発生時の緊急体制に組み込んでいなかった事務職員を、今年から生徒誘導その他の緊急対応要員としています。校内には、万一に備えて非常食と飲料水を保管し、校内のすべての清涼飲料水自販機も災害対応機としています。昨年

6月に発生した北大阪地震は、朝礼前であったため、登校していた生徒はグラウンドで点呼を行い、引き続き登校途中の生徒の安否確認をしました。幸い怪我や大きな被害はありませんでしたが、全生徒の帰宅には長時間を要しました。生徒には、このような事態も想定しておくよう伝えました。

教職員は、休日などに阪神淡路大震災レベルの大災害が発生した場合に備えて、居住地ごとに4ブロックに分け、ブロックごとの教職員集合地点をあらかじめ決めています。これは各ブロックの生徒と家族の安否確認を行うためです。また、ラジオ関西（AM神戸558MHz）からは学校からの連絡が放送されるようにしています。ご家庭でも、家具固定など防災・減災の措置と非常用食料備蓄、小学校など指定緊急避難場所についてお子様とのお話し合いいただき、万一の際の家族の集合場所を決めておくことなど、万全の備えをお願いいたします。

地震など大災害について、政府の地震調査委員会は、南海トラフの巨大地震（M8～9程度）の今後30年以内の発生確率について、70%から80%と報告しています。本校では、校内の建物全棟について「建物耐震診断」を行い、耐震性を確認するとともに、必要な補強工事を終えています。

「建物耐震診断」では、耐震指標（Is値）が出されます。震度6～7程度の地震に対する耐震診断結果のIs値は、数値ごとに以下のとおり判定されます。

Is値<0.3 …地震に対して倒壊または崩壊する危険性が高い

0.3≤Is値<0.6 …地震に対して倒壊または崩壊する危険性がある

0.6≤Is値 …地震に対して倒壊または崩壊する危険性が低い

Is値が高いほど、建物の耐震性が高いといえます。一般家屋では、0.6以上の数値が望ましいとされています。本校での耐震診断の実施時には、Is値0.2の箇所がありましたが、その後、所定の耐震性能を満たしていない校舎は、補強工事により全て0.7以上の数値となりました。

同窓会仮事務局（千と勢会本部）を校内に移設しました

学校の北東にある同窓会館（千と勢会館）は、1959年竣工で老朽化していました。「建物耐震診断」では、特に1F部分が脆弱で、最終耐震診断としてIs0.27となっていました。このフロアにある事務室では事務員が勤務し、「千と勢の英語教室」などで生徒が出入りしていましたので、安全性確保を最優先し、千と勢会仮事務局を中高の南館に移設しました。場所は、エセルホール入口の左側で、事業部室内に併設しています。

月火木金曜日の11～16時に事務員が在室しています。

連絡先 電話 078 - 861 - 0290

保護者おしゃべり会の予定

今年度第1回「保護者おしゃべり会」は、6月3日（月）14：30より、1時間程度を予定しています。案内のプリントを後日配布いたします。ふるってご参加ください。